

工事現場 見守るアニマル

かわいらしい動物をあしらった工事現場用のバリケード写真、仙台銘板提供などが全国に広がっている。殺風景な景色が一変し、道行く人を和ませている。

自転車道の工事が進む奈良市中心部の国道24号。通行を規制する鉄パイプが約200メートルにわたって並ぶ。上土のパイプをつなぐのは、樹脂製のシカ型バリケードだ。工事を請け負う建設会社の担当者は「工事現場の危険なイメージを和らげたくて採用した。以前は沿道が渋滞するとドライバーから苦情をいただいたが、動物のお陰なのか、いまは不思議でない」。

バリケードつなく支柱 注文増加

大人気の旭山動物園(北海道旭川市)に触発され、2006年にサル型を作ったのが始まりだ。1台につき動物が2個ついており、1台の長さは約4メートル。今ではカエル、ゾウ、キリンも加わり、同社の工事用レンタルバリケード約37万台のうち、4割強の約16万台を占める。今後、イルカや沖縄の魔よけ「シーサー」の導入も予定している。

「ご当地動物」も登場。同社の神戸営業所が地元の国土交通省関係者から「コウノトリをうまく宣伝できない?」と持ちかけられ、昨年1月に導入した。現在、約30社に1500台貸し出している。

工事受注へイメージアップ対策

動物型バリケードのレンタル料は、1台1日で約15円。通常より2〜3割高めというが、全国の土木・建設会社から引っぱりだ。人気の背景には、公共工事の激減で、何としても入札で工事を落としたいという業者の思惑もあるようだ。入札価格と価格以外の要素を総合的に評価して落札者を決める総合評価方式では、工事現場のイメージアップ対策も評価点に盛り込まれることがあるという。動物型バリケードのレンタル会社は、全国に数社あるとみられる。約3年前からカエルとタヌキを作っている福岡市の会社担当者は「建設会社から大好評で、西日本を中心に1万台以上を貸し出している」という。

(寺本大蔵)

